

マーケット概況（2019年7月）

7月の債券相場は、米中首脳会談で貿易協議の再開が合意に達したことからリスクオフの姿勢が和らぎ、10年355回債の取引は-0.145%で始まった。その後は、3日の中期、超長期ゾーンの入札において買入額が事前予想ほど減額されなかったことで超長期債を中心に買い戻しの動きとなり、4日の30年債入札を無難に通過すると、5日には債券先物9月限が154円02銭まで上昇し、10年355回債の利回りは月の高値となる-0.170%まで低下した。しかし、6月の米国雇用統計が好調な結果となり、米国債が続落となった流れから下げに転じると、11日にダウ平均株価が史上初の2万7,000ドル台に乗せるなかで債券相場は一段安となり、債券先物は153円33銭まで下落し、10年355回債の利回りは-0.120%まで上昇した。月の後半は、17日の20年債入札を順調に通過したことや、25日に行われたECB理事会で追加利下げが示唆されたことから買い基調で推移したが、月末に日米金融政策のイベントを控えて様子見姿勢の強い展開となった。29、30日に行われた日銀金融政策決定会合では金融政策の現状維持が決定され、フォワードガイダンスの内容にも目立った変更が見られなかったことから、相場への影響は限定的となった。月末に発表された8月の日銀オペ運営方針は7月から据え置きとなり、10年355回債の利回りは-0.160%で月内の取引を終えた。

<短国市場>

前月に続き3Mゾーンは需要が乏しく-0.1%前半を中心に推移した。5日の3M842回債入札は9月末越え償還になるため最高落札利回りが-0.13%台に低下した。1Y～6Mゾーンは欧米市場での利下げ期待による金利低下圧力が落ち着いたものの、9日の6M843回債入札は年越え償還になることから-0.19%台と堅調な結果となり、セカンダリー市場では-0.260%まで低下した。一方、3Mゾーンは引き続き需要が乏しく12日の3M844回債、19日の3M346回債は-0.13%台となった。26日の3M847回債は-0.12%台に金利上昇し需給環境の悪さが反映された結果となり、セカンダリー市場では-0.120%で取引を終えた。

<一般債市場>

新発10年政保債の条件は6月債の0.005%を下回り下限金利0.001%で決定した。過去最低のクーポンとなったが順調に消化が進んだ。10年地方債は6月後半債の東京都債、愛知県債より絶対値方式に移行し、7月債も下限利率で決定した。既発債は目先の金利先高感が乏しいことから売りも限定的で、需給に大きな変化は見られなかった。社債は、東京電力パワーグリッドやヤフー、みずほFG永久劣後債など大型起債が相次ぎ、7月として過去最高となる1兆9,132億円が起債され、高クーポン債を中心に販売は順調だった。また、商船三井が国内事業会社として初めてリテール債のサステナビリティボンドを起債し、ESG投資の対象として好感された。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#355	-0.140(2日)	-0.170(5日)	-0.120(12日)	-0.160(31日)
#354	-0.145(1日)	-0.180(5日)	-0.130(10日)	-0.170(31日)
#344	-0.245(1日)	-0.265(3日)	-0.215(12日)	-0.255(31日)
#140(5Y)	-0.230(9日)	-0.250(31日)	-0.210(12日)	-0.245(31日)
#169(20Y)	0.240(17日)	0.200(31日)	0.240(17日)	0.200(31日)
#843TDB(6M)	-0.185(9日)	-0.260(24日)	-0.185(9日)	-0.260(24日)
#841-#847TDB(3M)	-0.109(1日)	-0.160(12日)	-0.109(1日)	-0.120(29日)